



第八章
人間の成長

〔二七二〕 種子は暗い土の中に置かれ、十分な力を養って生命を吹き出す。ちょうどそのように、人もやがて霊的生命を吹き出すために、予め暗い地上に置かれ、人間の経験を重ねて力を蓄える。人の最も嫌がる悲しみ・苦しみ・涙・失望・災い・苦痛、これらも実は魂にとり、極めて価値ある経験である。

〔二七三〕 しかし苦しんでいる時にはその事は分からない。後になって過去を振り返ってみると、それが初めて分かる。その場その時その事だけで、人生を判断してはいけない。逆境によって、人格は試練をうけ、涙と悲しみによって、魂は力を得る。

〔二七四〕 私達は人生を見るに、肉の目をもってしない。生命の真実の姿を見通す霊の目をもってする。賢明な人とは、人生のあらゆることを、魂の成長のために生かそうとする人。こういう人はどんな試練にあつても、背中を見せようとはしない。内在の力を働かせて、困苦に直面しようとする。何となれば、人格の成長と強化は、実にこの精神にあるから。

〔二七五〕 法は完全であつて、その働きは自動的である。誰一人として、この法を免れることは出来ない。自由意志、これさえも法である。その働きは、見る目をもつた人にははっきり分かる。彼

等はそれが分かる段階にまで進歩しているから。

〔二七六〕 人の自由意志は、自分が現在達している進歩の器量に応じて發揮できるにすぎない。人の行為もまた自己の器をこえて何事もなすことは出来ない。すべてその魂の進歩の段階によって、限定されているのである。

〔二七七〕 人は神の一部であり、無限の神性が發揮できるようになっている。人はその神性が發揮されるにつれ、高遠な法が分かるようになる。

この法は、他の法と矛盾するものではなく、人の進歩に応じて、初めて感得できるものなのである。

〔二七八〕 人間の可能性に限界はなく無限である。美の極限、音楽の輝き、いずれも際限はない。魂が高く進歩の枠を広げていけば、美と調和の世界は、ますます大きく魂の前に展開される。貴方が向上するにつれ、一層広大な調和の世界が、貴方をそこで待ちうけている。

〔二七九〕 低級な魂には高級なことは分からない。高級な魂には低い段階のこともよく分かる。あら

ゆるものの調和を支えている法は、自動的に働いていて、人はその魂が成長して、法に触れる域に到達するまでは、法を自家薬籠中のものとすることはできない。

〔二八〇〕 一歩進歩しては、さて次の進歩をどうするか、自ら選択する。だが、その選択は遅らせることもできる。貴方が時々刻々に何を行うか、これは貴方と法との相互作用で決定されるのであって、しかもその相互作用は自動的に行われる。また、どの程度の進歩を選ぶかは、進歩の現時点での本人の意識の反応、それによって決定される。

〔二八一〕 皆さんからシルバー・バーチと呼ばれている私は、霊界の無限の知識のほんの一小部分を代表しているにすぎない。皆さんが成長するにつれて、私よりもっと偉大な霊師達は、私を使ってもっと高級な知識と知恵を皆さんに伝えることができる。

もうこれでおしまい、ということはない。完全はとどまるところを知らない。皆さんは進歩しつつある、そうして私もまた。私より高い所にいる霊達がこう言っている、彼等の背後には、更に高級な霊達があつて働いていると。上には上と、そこに終りはない。もし人がその終点に到達するなら、それが創造の終りということになるから。

〔二八三〕 人類は永い年月を要しながら、今日のように肉体を進化させてきた。緩慢な変化、しかし徐々にその程度を高め進化し、土から空へと高まっていった。

徐々にその動物性は振り落とされ神性が顔をのぞかせてきた。どんなに永い年月が、今日の肉体に進化するまでにかかったことだろう。しかもなお進化は終わっていない。さて、人類の魂の進化には、はたしてどれ程の年月がかかることか。

〔二八三〕 先頃まで、人類は猿であつた。いや、正確に言うると、猿ではなくて、猿の肉体を通じて働いている霊であつた。この霊とは神の分身である。

貴方はどこで生をうけようとも、神の息をもっている。これがなければ生命はあり得ないから。しかもこの神の息には段階がある。それは進化・発展、即ち低次のものから高次なものへと進んでいく変化が。

〔二八四〕 しかも一切が神の息である。たとえば地上最低の生命形式も神とつながっており、また過去地上生活を終えた最高の聖者とも結ばれている。それはすべての内部に神が在り給うからだ。従つて、地上最悪の人間と至純の魂の人も兄弟である。互いの内部には、同じ神の息がこめら

れているから、誰も皆、神の法を超えることはできない。お互いは皆、深い縁で結ばれた間柄だからだ。

〔二八五〕いろいろな種しゆを含んだ類魂がある。かつて猿であり魚であり鳥であったのは貴方ではない。それは今、貴方の身体を通じて働いているこの類魂である。貴方はその類魂の一部。

〔二八六〕問）生まれつき跛者はしやとか盲目とか、自分の罪でもないのに、どうしてこういう子供が生まれるのか。

〔答〕魂のことは、外側から見では分からない。魂の進歩の問題と、その道具である肉体の問題とを混同してはいけない。

たしかにいわゆる不具はある。それは両親かまたはそのどちらかからの、遺伝という自然法則に基づくものだが、しかしそのために、魂の進歩に支障をきたすということはない。

生まれつき肉体に欠陥のある人は、一般に魂のどこかに、償わねばならない点があるのであって、この障害を通じて、これらの人達は、以前よりも親切で、寛大温和な性質を獲得するのである。この宇宙には、償いという永遠の原理があるのであって、何ものもこの因果の法を免れるものは

なう。

〔二八七〕(問) 私達は死ぬと皆、地上経験の試練を耐えた自分の人格で評価されるわけだが、精神病者で自分で責任をとれない人は、どういふことになるのか。

〔答〕貴方は物質の事と霊の事を混同している。脳細胞が狂っていれば、地上では混乱をひき起こす。だが魂の方は、かりに機械の狂いのために、地上では自己表現ができなくても、自分の責任はちゃんと心得ている。

神法は、本人の魂の進歩の程度に応じて働く。魂は永遠の英知の物差しで評価され、決して地上の規準ではかられることはない。地上の規準に違反する魂は、地上の物差しでは悪い評価を受けるだろうが、魂にその事の責任をとるだけの資質がなければ、霊界では問題にされることはない。このことは、いわゆる狂人が人を殺し、自殺をした場合も同様である。機械が故障なのだから、これは非難するわけにいかない。他界における裁きの規準は、常に魂の動機による規準、これである。これによる限り、誤謬というものはない。

〔二八八〕(問) 肉体の故障のために、魂が地上生活の教訓を学べない時は、霊界ではどんな位置を占

めますか。

(答) 機械が故障だから、魂には経験が記録されない。だから、こういう魂は地上経験を損じたこととなる。つまり肉体的経験の価値をもたなかったことになる。しかし償いの原理は絶えず働きつづけている。

(二八九) (問) 地上では、貧民街に生まれて、衣食も道徳も精神も貧しい中で育ち、辛く単調な労働に身を任せねばならない者、あるいは生まれながらに美しい環境に育ち、何不自由のない生涯を送る者があります。この不公平は、いったいどのように考えたらよいのですか。

(答) 魂はみずからの進歩を正直に記録するもの。地上の者は、いつも物質の面から物事を評価し、魂がどのように反応表現するかという点からは物事を見ない。貧乏に生まれようが金持に生まれようが、魂が自覚をもち自己を発揮するに必要な奉仕の機会は、誰にでも等しくある。これをやるかしないか、それだけが評価の規準である。地上の事はすべて、物質の面からのみ評価されるから、どうも不公平を生みやすい。肝心なことは魂の反応、償いである。魂が困苦を通じてどのように自己発揮を学んでいくか、そこに真実の応報がある。